

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30円

2010年2月20日

第 322 号

「地域で生きる」

を当たり前に

つばさ静岡 事務長 羽山 純

つばさ静岡は重症心身障害児施設です。重症心身障害児とは、重度の身体障害と重度の知的障害を併せ持った人たちです。その多くは、胎児期や乳幼児期の脳の重い障害が原因とされています。彼らの中には、経管栄養や気管切開、人工呼吸器装着などにより看護的なケアを必要とする人たちがいます。

つばさ静岡の場合は利用者の約1/3(20名あまり)がそういう人たちです。彼らは、ご家族の厚い愛情によって育まれてきました。それは施設に入所した今も変わりません。ただ、ご家族が高齢であったり、障害があまりにも重度であったり、ご家族だけで24時間の介護を行うことが著しく困難なためつばさ静岡での暮らしを選ばれました。

そして今も在宅で家族の介護を受けながら暮らす人たちがいます。こうした人たちの介護負担を軽減し、在宅重症児者の生活の幅を広げることを支援するために、つばさ静岡は、短期入所と通園事業をおこなっています。そのニーズは年々増加し、私たちの能力を大きく越えるものになってきています。

このことは、在宅支援に量的な拡大だけではない大きな発想の転換を求めているといえます。そうした状況を受けて昨年度静岡県は、『重症心身障害

児(者)の在宅支援施策検討会』を設けて検討を重ねてきました。その委員として参加することができ、多くを学びました。検討会の座長である増田樹郎氏【愛知教育大学教授】は報告書のとがきで、次のように述べています。「：一つは「重心児者に対する支援」である：医療的ケアが必要条件であるとしても、日中活動の機会や場がなければ十分条件が充たされたとはいえない。：」

二つには「家族等に対する支援」である。従来までの支援の軸は、：あくまでも家族介護を一時的に補うサービスである。他方、ケアホーム等の受け入れへの期待は、家族介護に代わる新たな「住まい」の確保であり、：この声に応える努力も惜しまれてはならない。

三つには、前述の2つの支援を可能とするための「支援システムの整備」である。：ケアの各種専門機関としての「点」と情報と人材のネットワークという「線」、そして市町を軸とする圏域としての「面」をつなぐ試行がその成否を分ける。：」

地域で暮らすことが、施設から出ることであるとすれば重症児者の場合、家族の介護のもとに暮らすしか、現実の選択肢はありません。

しかし、つばさ静岡の相談支援事業が受ける相談には在宅で暮らす重症児とその家族の逼迫した状況が伝わって

きます。家族の彼らとともに暮らしたいという気持ちを尊重しながら、家族に過重な負担をかけない『地域の暮らし』が求められていると思います。

先日、つばさ静岡のリハビリホールで「城北の福祉を考える会」が開かれました。地域の皆さん80人程が参加され、地域の福祉活動の紹介と、カントリーソングのライブがおこなわれました。あいにく、巷のインフルエンザ騒動の影響で、利用者の参加は見合わせる事になりましたが、つばさ静岡が地域の一部としてご理解をいただきつつあることを実感した出来事でした。

つばさ静岡で暮らす人たちがつばさの利用者としてではなく、つばさ静岡で暮らす〇〇さんとして、地域の人たちとのかわりが生まれる日も遠くないかもしれません。

今つばさ静岡では、看護師の確保が難しい状況が続いています。全国的な看護師不足の余波でもあるわけですが、それ以上に、濃厚な医療的ケアと、暮らしの実現という課題、そこに看護の専門性を生かしながらかつかわるためには、障害のある人と向き合う「思い」が大切なのだと思います。

家族に愛され、精いっぱい力で生きようとすると彼らを支え、全力での、しかしかすかな表情の変化に一喜一憂するこの仕事のやりがいとを共有してくださる方のご応募をお待ちにしています。

小羊学園 職員座談会

地域生活を考える

2月2日(月)、浜松地区の地域支援に関わる施設の支援担当者が集まり浜松エリアの地域について、それぞれの立場から話してもらいました。

司会 稲松 義人 (法人理事長)
参加者 雨宮 寛 (相談支援事業所アグネス 管理者)

出水 厳生 (小羊デイケアホーム 施設長)
鈴木 龍一 (オリーブの樹 サービス管理責任者)
鈴木 良成 (三万原スクエア サービス管理責任者)

相談支援からみえる地域

稲松…三万原スクエアという新しい施設を作って施設支援を行っています。小羊学園は従来、施設を作ったところに利用者を受け入れるという形で今まで事業展開をしてきました。そこで、受けた人たちをどのように支援するのかを考えてきました。自身も今年度は、地域に足場を置いて、地域にいる人たちにとって何が必要なのかを考えると、施設を利用しながらも、どう地域で生活する人に添っていくのか、今後の事業展開にとっても大事なかなと思っています。

今日、集った皆さんは在宅の人たちの支援を中心に関わっていますが、それぞれの立場で小羊学園が今後こういう仕事をしていくべきかと感じていることを話していただきたいと思います。



雨宮 寛 氏 (アグネス)

雨宮…相談支援事業所の立場で、個々の色々なケース・事情を聞いていくと内容は本当に様々です。その中で、困っている状況が出てくるのは何なのだろうか、自分の中でも疑問に思っているところですが、障がいを持った人たちや家族が、これからの生活をどのようにしていったら良いのか見通しが立たないんですね。昔なら家でみるか施設に入る程度の選択肢だったんですけど、近年は様々なサービスを選択できるよ

うになってきました。しかし、自己実現のために、そのサービスを上手に使えるようにつながっていくためにはどうしたら良いのか、見えていない方も多くいらっしゃる。情報がうまく当事者に伝わっていないという現実もあるのです。

受けての施設や事業所が旧態依然として受け入れ施設として、利用している人たちには対応するけれど、来ない人には目が向かないという状況もあります。そこがまだ、施設が地域に目を向けられていないと感じるところですね。だから、相談事業所として、当事者と事業所がうまく繋がらないと感じていますね。その辺が「地域・地域」と言いながらも実際の地域を見ていないと感じる施設もあります。

日中活動のニーズと実情

稲松…通所施設という意味では小羊デイケアホームが法人では最初に始めていますが、利用ニーズが増えると、現在利用している人たちの展開も考えなくてはいけないと思います。そこで、実態も含めながら今後の方向性として感じていることを聞かせてください。

出水…デイケアホームは現在、在宅の利用者を受け入れている場所ですよね。地域生活という視点で考えると、割と確立した事業所であって、ここに通ってくることで自体が地域生活だとも



稲松 義人 氏 (法人理事長)

言えると思います。しかし通ってくるだけではなく、支援の中身を考えたときには、施設内で活動に留まらず、周りの環境やその人たちとの関わりを持ち活動することが大切だと思いますし、そのことを前提に事業を考えたいと思っています。現状で言うと、重い障がいの方が通える社会資源が少ないのが大きな課題だと思います。

デイケアホームだけでなくマルカトやオリーブの樹の状況を見ても、定員がいっぱいになっている現状で毎年特別支援学校の卒業生も希望されてくるので、社会的な基盤整備をする必要があると感じています。普通の人であれば、学校を卒業する時点で様々な選択肢の中で進路を決められると思うのですが、障がいを持つ人たちの選択肢は限られていて、社会資源はまだまだ足りていないのが現状だと思います。これらのことを小羊学園のみで考える

ことには限界があると思うので、行政や自立支援協議会など浜松市全体で計画を進めていけるようになってほしいと思うところです。法人の通所施設として考えたときには、重い障害を持った人や、対応の難しい人たちが、社会生活や地域生活を送れるよう専門性を持ちながら支援できる通所施設でありたいと思っています。

稲松…デイケアホームとは違った時代に始まったオリーブの樹では、地域の人たちを受け入れながら、なおかつ学齢期の放課後支援も行っていて、年齢的にも障害的にも様々なタイプの方を受け入れていると思います。すでに成人も児童も定員枠はオーバーで、枠を増やししながら、そのニーズに応えるという発想になり、施設を作ってそこに受け入れるパターンになってしまふ。実際の現場を見ていて、今後の事業展開でどのようなことを感じていますか。



出水 厳生氏(小羊デイケアホーム)

龍一…オリーブの樹では、成人の通所だけをやっていた時には、地域のニーズをそれほど感じていなかったのですが、児童の放課後支援を始めてから、



鈴木 龍一氏(オリーブの樹)

子どもの保護者が将来を意識し始めて、将来的な通所の希望が出たり、進路に関してお母さんたちのネットワークの強さを感じているところです。定員が一杯で、この先どうして行こうかと考えた際に、オリーブ単体ではなく、浜北地区に限らず、他法人事業所や浜松市と連携をしながら、なるべくその方が地域で完結できたり、その方にとって適した日中活動ができる場所を、オリーブが情報提供や仲介できるように考えないと、この課題は永遠に続くのではないかと感じます。他の施設の状況を聞くと、新規利用者の受け入れに関して躊躇するところもあるようです。実際、行き場を失い、最終的に小羊学園で何とかして欲しいというケースもありました。次年度、受け入れ予定の方で、西区から利用される方もおりま

す。利用者にとって、住み慣れた地域の中なのか、ご本人にとって適した活動場所なのか、何らかの整理をしていかないと収拾がつかないのではないかと感じています。

児童については、支援の身が問われていると思います。放課後連絡協議会などを通して、互いにスキルアップできるようにしていきたいと思うのです。

稲松…マルカート、ドルチェも同じようなことを感じています。

居住型支援のあり方

稲松…三方原スクエアは入所施設ですが、数年前から高等部卒業を契機に、進路を探し、在宅生活に戻す支援もしています。このことをきっかけに、児童施設としての意識が変わってきたとも思っています。今後、児童施設を利用する子どもたちに対して、スクエアのイメージとしてどのように感じていますか。

良成…ここ数年、高等部卒業を1つの区切り、地域生活を選択肢に入れた進路を決めるわけですが、契約する際に児童施設の役割を説明し、卒業後の進路については学校と連携を取りながら、ご本人・ご家族の意向を大事にしながら検討、バックアップしてきました。今年も2名の方が、在宅、ケアホームに生活の拠点が変わります。今

は、それぞれの事業所の役割があり、連携・協力する中で調整して、在宅での生活を支える方向に考えられるようになってきました。ご本人+家族の状況もありますので、在宅に返すということが難しいケースもあります。そういう中で、ご本人を中心において、事業所や関連団体が関わり、その人を支えていくシステムを考えなければいけないと感じていますね。児童施設として、通過施設としての役割をはたし、成人になっても延長措置にならないよう考え、ご本人が家族と暮らせるような状況を作っていきたいと思っています。



鈴木 良成氏(三方原スクエア)

稲松…スクエアが児童施設で児童の流れを作りました。一方、成人の地域移行でケアホームに移行しようという流れが法人内でもありますが、地域に移すことで本当に大丈夫かなと思う部

分もあります。今後の展開を考えた時
にどのようなところを基軸に考えるべ
きだと思いますか。

良成・小羊学園からスクエアに移転
改築した際に、児童の定員を30名から
20名に変更し、その分在宅支援拡大の
ために短期入所の枠を10名分確保しま
した。成人を含めた短期入所の枠を作
る中で、これまで入所施設で生活され
てきた方の、ケアホーム移行も検討し
てきました。

入所施設から、ケアホームへ移行す
る議論の中では、ご本人の希望を受け
ながら、支援者の立場で考え、この方
は地域で生活が可能であろうと判断し
た方もいます。これから、どういふ
うに地域で支援していくのか課題になっ
ています。必ずしも、地域の中で生活
するのが良い方ばかりではなく、身体
機能や行動面など入所施設のような体
制の中で生活するのがよい方もいると
思うのです。これらの方の将来的な生
活のあり方は、ケアホームはもちろん
成人部でも課題とされています。

今現在、成人部の申し込み希望が50
名を越えている現状で、居住型支援の
枠を広げることは難しく、ケアホーム
で生活が可能な方には整備も含めて考
えていかなければいけないと思ってい
ます。入所施設の定員枠は広げらず、
今後、入所施設の機能を必要とする在
宅者の人たちの支援を行うためにも、

ケアホームの整備や日中活動場所の保
障を検討すべきであると思っっています。

稲松・入所施設が終の棲家という発
想もあるが、ケアホームで生活するこ
とがふさわしい人と、中には入所施設
のほうがふさわしいであろうと思う人
もいるということですね。いずれにし
ても利用者にあった生活を提供するこ
とだと思えます。

これから先のこと…

稲松・日中活動も同じようなことが
言えると思えます。利用者が年を重ね
て状況が変わったり、様々なタイプの人
たちを受け入れたりしていく中で、
選択肢や活動のペースを考えていかな
くてはいけないと思うのですが、実際



2月2日に行なわれた座談会の様子

に通所施設ではどう考えていますか。

出水・オリーブの樹は雰囲気が少し
違うのかもしれませんが、デイケアホー
ムとマルカートは利用者の状況や雰
気、活動の様子は似ていると思ってい
ます。活動の中身やプログラムなど、
法人内の事業所で整理できるといいの
ではないかと思うのですが…。今のこ
ころは、その余裕が少しないというの
が正直なところで、各施設の中で、み
んなが過ごしやすいように工夫してい
るのが実情です。ペースは、重い人で
も活動に参加できることだと考えてい
ますので、日課や活動はわりとゆっく
りしていて、関わりを大事にしながら
支援しているのが現状だと思います。

龍一・オリーブにはわかきからケア
ホームに移り、地域で生活している人
がいるので、年齢が60歳代の人もいれ
ば学校卒業後したての10歳代の人もい
ます。若い人たちは色んな経験ができ
ますが、60歳代の高齢の方にとっては、
同じペースで行うのには無理があるの
ではないかと思えます。では、高齢の
人たちに年齢に応じたプログラムを提
供できるかどうかという点、それも難
しい現状です。スペースの問題もあり、
子どもたちがいて、青年がいて、高齢
の方がいてという空間は、正直、支障
があります。

最近では、就労経験や他の授産施設に



議論が進むにつれて、想いが膨らんできました。

通えなくなった人の相談もあり、そう
いう人の選択肢がないとも感じていま
す。年齢的な幅があると、ペースが違っ
てくるので、個々にあった支援が難し
いとも思っており、年齢相応の支援体
制を作りたいと思っています。

もう一つ。わかきが「工房わかき」
で20年やってきた木工作業を今後も継
続するか否かを、わかきの職員と議論
している最中です。

雨宮・施設の中で選択肢を考えるよ
うな発想よりも、幅を持たせてもっと
広いエリアの中で、課題解決を探って
いくべきではないかと思うのです。こ
れまで、何かがあるところを選んで利
用しているのではなく、希望される方
の状況に合わせて活動を提供してきた
感じがある。本人のことを考えた時に、
自分の事業所で良いのかということ考
える視点が必要だと思っています。

龍一…先ほど、話した就労経験のある方の受け入れは、まさしくそのことだと思えます。このまま生活介護の利用がご本人にとって、決して良い事ではないかと思っております、将来の進路を考えたと思うのですが、それを一事業所で行うのか、コーディネートするのか、判断しかねることがあります。相談支援事業所を通していくつか事業所を当たったが、どこも受け入れが難しく、オリープを利用することになったという経過があります。



通所施設は、地域の重要な社会資源であると語られた。

雨宮…ご本人に合う合わないという選択ではなく、近くて受け入れてくれる場所がオリープだったということですよ。結局、契約とか選択とか言う以前に、空きがなければどうしようも無い状況が現実にはあるわけですよ。相談を受けた時点で、ご本人の意向や適したプログラムを確認して、その

希望に添うと、今度は家から随分と離れたところになってしまいうケースもあります。結局、ご本人やご家族の希望の中で何かを諦めるざるを得ないことも出てきます。こういう状況が変わっていかねばと思うのですよ。

稲松…次に向けて、入所で言えば支援センターわかぎの改築にむけた課題がありますし、事業拡張ではないですが通う場所の確保という課題があります。また、入所枠が拡大できないことを考え、ケアホームの整備という課題もあります。その3点に絞って、法人内のプロジェクトチームを立ち上げ、議論を開始したところですが、今、皆さんの話しを聞きながら、小羊学園が今後、地域のニーズに即した事業整備を進めるべきなのか、あるいは違った発想で地域を支えていくべきなのか聞かせてください。また、法人のあり方について、心に留めておくべきことは何なのかを聞かせて欲しいと思います。

稲松…法人内で何か役割を考えると、いう発想を持てば、どんな人も抱まないと流れるが続くのではないかと。小羊学園は浜松市の中で、どんな役割を果たし担おうとするのかという視点で、方向性を見出せればと思うのです。授産や就労など、他の法人が得意で、お願いできる部分は任せながら、市全体で考えられるといいなと思います。

出水…小羊学園としてやるべき事業というはあると思っておりますが、法律や事業が変わっていく中では、余裕がなく、正直どうしたらよいか判断できない状態であると思っております。そのためにも、浜松市の中で小羊学園の役割は何なのかを、はっきりさせて、どういう支援をすれば、在宅の障害者の生活が組み立てられるかを考えて、整理するなかで、これからの方向性を見出せばいいなと思っております。

龍一…自分たちだけで完結するのではなく、他事業所も含めて、ご本人を取り巻く周りの人たちと、一緒に考えていくことが必要だと思っております。小羊学園が「なんでも屋」になるのではなく、他の事業所が持っている専門性には委ねるべきだと思います。

また、小羊学園の理念の中で大事にしてきたことを伝え、一緒に地域のことを考えられたらいいなと思っております。正直、自分たちでこれ以上上げていくのは難しいと思っております。自立支援連絡会のように、地域と一緒に物事を解決していく仕組みができると、若い保護者も含め、これから福祉サービスを利用する方たちも安心するのではないのでしょうか。

良成…事業所単位で利用者の暮らしを考えるのではなく、いかにしてもっと広い環境の中で考えられると、

他事業所の方向性も把握した上で検討していかないと、小羊学園のみでは多分限界が来るのではないかと思います。浜松市における協力の力で展開できると、それぞれの施設の役割が明確になっていくのではないかと思います。そうならば、利用者の選択肢の幅が広がったり、施設の役割が明確化してくるのではないのでしょうか。

基本は利用者の生活をどのように考えるかということだと思っております、小さな枠で考えず、地域という大きな視点で考えることだと思っております。



入所施設の立場から地域について話す良成氏

稲松…三方原スクエアが周りの人たちに新しいものを感じてもらえるような展開をしていると思います。まわりの人たちを巻き込みながら、新しい提案ができるような展開に広がってほしいなと感じました。ありがとうございました。

ちょっと役立つ、福祉の豆知識！① ～ 知的障がいの定義 ～

法令上、一般的な知的障がいの定義は存在しませんが、2000年6月に行われた厚生省「知的障害児(者)基礎調査」における定義では、「知的機能の障害が発達期(おおむね18歳まで)にあらわれ、日常生活に支障が生じているため、何らかの特別の援助を必要とする状態にあるもの」とされています。数値化された知能検査では、知能指数70ないし75以下で定義づけられることもあります。

つばさ静岡 看護師の募集

静岡市にある重症心身障害児施設つばさ静岡では、引き続き看護師を募集しています。看護資格をお持ちで、興味のある方は、ご連絡下さい。

連絡先：054-249-2830
つばさ静岡 担当 羽山

「コーヒーショップ」啓

「ホットコーヒーを2つ下さい」「僕はジュースがいいな」三方原スクエアの交流スペースに楽しい会話が響きます。聖隷クリストファー大学大学院の方たちが、毎月1回日曜日の午後後にコーヒーショップを開いてくれます。施設を利用する人と学生や地域の人達との交流を目的に、社会福祉研究事業の一環として始めました。

「美味しいですか」「ウン、ウン、また来るね」こんな自然な会話の中から、新しい交わりが生まれるのです。

本格的なコーヒーが一杯100円(お菓子付)。あなたも立ち寄ってみませんか。開店日のお問い合わせは三方原スクエアにご連絡ください。



おいしいコーヒーを飲んで、心も身体もあつたまります。



— 小羊写真集 ⑦ —

友だちと遊ぶ

開園してまだ月日が経っておらず、園庭も整備されていない頃の写真です。

4人の子どもたちが、手押し車で遊んでいます。車を引っ張る子、車に乗っている子、「次は僕だよ」と思いながら、順番を待っている子。

車という媒体を通して、子どもたちの人間関係が形成され、仲間や友だちという気持ちが育まれていったのでしょうか！

編集後記

法人では、浜松地区の将来的な事業展開を検討するため、昨年7月から3つの部門に分かれて、プロジェクトチームが立ち上がりました。各部門で、地域のニーズや支援のあり方を協議しつつ、これから小羊学園は、どのような仕事をすべきか話し合いが行われています。プロジェクトチームに参加して感じることは、将来的な事業展開の検討も重要だが、事業の軸となる理念をまず確認することが大事だろうと思っています。時代が変遷しようとも、障がいのある方が安心して生活できる軸がぶれないようにと、思うのです。まだまだ、寒い日が続きます。お身体、ご自愛下さいませ。(F)

小羊学園を支える会

2009年度寄付金報告

1月受付分 766,462円 (47件)
累計 8,572,556円 (527件)

小羊学園への寄付金振込み先

(口座名義)「小羊学園を支える会」
郵便振替口座 00890-4-45415
りそな銀行浜松支店 (普通) 040005
静岡銀行細江支店 (普通) 043483

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りします。下記へご連絡ください。

小羊学園を支える会事務局(鈴木)
三方原スクエア内 ☎053-414-1833